

# 圓子 哲雄（まるこ・てつお）

## 1、プロフィール

詩人村次郎を師と仰ぐ誠実な詩人。丸山薫等の編集による「四季」を手本とした詩誌「朔」を発行。郷土先達詩人の業績を顕彰しつつも詩人杉山平一等多くの中央詩人とも交流。

<生没>

1930(昭和5)年 11 月 20 日 ~ 2021(令和3)年8月 24 日

<代表作>

『受胎告知』『遠い日』『父の庭』『母の径』『庭の径』『年輪』『圓子哲雄詩集(日本現代詩文庫)』

<青森との関わり>

父親が三戸郡倉石村出身。昭和 20 年9月に生地 of 埼玉県熊谷市から八戸市へ。長く八戸を活動の拠点とした。

## 2、作家解説

理学部農学科出身の詩人圓子哲雄はありきたりの文学青年ではなかった。昭和 46 年(40 歳)に「朔」という詩誌をはじめると、体裁・内容など昔の「四季」をそっくり真似しようとした。詩人杉山平一はそれは凄いことだと言う。なぜなら大戦後詩壇では抒情への批判が強く、その代表格としての「四季」への悪態、軽蔑の声常識のようになっていたが、その中で圓子は敢えて「四季」に追随すると表明したからだ。しかし一般の所謂文学青年や詩人とは違い、圓子は篤実な人柄であり、その詩編は誠実な人格に支えられている。20 歳代に詩を志していたが、佐藤惣之助の「詩を志す人は 10 年黙って自分の詩を書け、その後他人の詩を読め」という言葉を読み、それを守ったと言う。40 歳になってはじめて詩に触れたのではなく蓄積があったのだ。詩集『受胎告知』から『遠い日』『父の庭』『母の径』『庭の径』『年輪』へと、長篇小説のように一貫して誠実に自身を語って行く詩人は

珍しい。しかもその喜びも苦しみも哀しみも、人生肯定観によって貫かれている。誠実な人柄は多彩な交際からも伺える。復刊「四季」の会員となり投稿したのを機会に、詩人丸山薫との文通が始まった(昭和 44 年)。アメリカの日本文学研究者テッド・ファウラーと知り合い(昭和 52 年)、以後親交を深めていった。またそれに先立っては、高木恭造の紹介で村次郎と出会い(昭和 42 年)、その人となり、高邁なる精神風景に触れ、また何物にもならないというその生き方にも衝撃を受け、生涯の師と心に決め、村次郎の未発表詩集原稿を筆写したり、村次郎との対談をメモにまとめることに取り組んだ。(引用参考文献『圓子哲雄詩集-日本現代詩文庫 80』(土曜美術社)より著者年譜、及び杉山平一著「圓子哲雄の人と詩」)

### 3、資料紹介

○『年輪』

図書

1988(昭和 63)年 11 月 20 日

208mm × 151mm

著者6集目の詩集。37 歳で詩を始めた遅い出発から 20 年を迎える時にまとめられた。「年輪」という題が象徴するように、20 歳代で詩を志して以来の文学的生活と文学的空間が鏤められている。二度目の晩翠賞候補となった珠玉の作品がそろっている。